

「エル・クラン」★★★★

2016（平成28）年10月9日鑑賞＜シネ・リーブル梅田＞

監督・製作・脚本：パブロ・トラペロ
アルキメデス・ブッチオ（ブッチオ家の主人、父）／ギレルモ・フランセーヤ
アレハンドロ・ブッチオ（長男）／ピーター・ランサーニ
エピファニ・ブッチオ（母）／リリー・ボボヴィッチ
マギラ・ブッチオ（次男）／ガストン・コッチャラーレ
シルビア・ブッチオ（長女）／ジセル・モッタ
ギジェルモ・ブッチオ（三男）／フランコ・マシニ
アドリアナ・ブッチオ（次女）／アントニア・ベンゴエチエア
モニカ（幼稚園教諭、アレハンドロの恋人）／ステファニア・コエッセル
2015年・アルゼンチン、スペイン映画・110分
配給／シンカ、ブロードメディア・スタジオ

＜こりゃ必見！アルゼンチンのこの監督に注目！＞

ベネチア国際映画祭の銀獅子賞とは監督賞のことで、過去①『座頭市』（03年）（『シネマルーム3』321頁参照）で日本の北野武監督が、②『うつせみ（空き家／B i n - J i p）』（04年）（『シネマルーム10』318頁参照）で韓国のキム・ギドク監督が、③『ザ・マスター』（12年）（『シネマルーム30』213頁参照）でアメリカのポール・トーマス・アンダーソン監督が、それを受賞している。そんな栄誉ある賞を2015年の第72回ベネチア国際映画祭で受賞したのが、1971年にアルゼンチンで生まれたパブロ・トラペロ監督だ。

もっとも、その名前を聞いても、また彼のこれまでの作品だという『檻の中』（08年）、『ハゲ鷹と女医』（10年）、『ホワイト・エレファント』（12年）を聞いても全然知らないから、彼の認識度は日本では低いはず。また、1980年代にアルゼンチンの首都ブエノスアイレスで現実に起きた、アルキメデス・ブッチオを家長とし、妻のエピファニ・ブッチオと3人の息子、2人の娘たち一家＝「ブッチオ家」による身代金誘拐事件を知っている日本人も少ないはずだ。

ブッチオ家による身代金誘拐事件は1982年から1985年にわたって続けられていたが、85年8月23日に警察がブッチオ家の自宅に踏み込んだことによってジ・エンドとなり、アルゼンチンのもとより全世界をビックリさせたそうだが、パブロ・トラペロ監督はそのニュースを13～14歳の時に聞いたらしい。現実に起きた事件を素材とした映画は多いが、パブロ・トラペロ監督が少年時代にニュースで聞いた事件をこのように映画化しようと考えたのはある意味当然かもしれない。映画は勉強！そう考えている私にとって、そんな本作は必見。そしてパブロ・トラペロ監督に注目！

＜あの時代のアルゼンチンは？4つのコラムも必読！＞

1982年3月から6月まで3カ月間続いた「フォークランド紛争」は、イギリスとアルゼンチンとの間で大西洋のフォークランド諸島の領有権をめぐるて起きた紛争。イギリスは地上軍のみならず軍艦や航空機まで参加させたが、それを指揮したのが「鉄の女」の異名をとったサッチャー首相だ。結果的に、アルゼンチン軍は近代的武装を誇ったイギリス軍に太刀打ちできずに降伏し、両国の国交が回復され、戦争状態が正式に終結したのは1990年となるが、現在もなおアルゼンチンは領有権を主張しているそうだ。フォークランド紛争について私はこれくらいの知識はもっている。

また、日本で有名なのは、アルゼンチンのフアン・ペロン大統領の2番目の妻として国民に絶大な人気を誇った、エバ・ペロンを主人公にした人気ミュージカル『エビータ』。ちなみに、9月22日に観た『コロニア』（15年）（『シネマルーム38』161頁参照）では、ナチス・ドイツの残党がアルゼンチンに逃れ「コロニア・ディグニダ」を作ったうえ、アルゼンチンの軍事政権と結託していたことをはじめて知った。アルゼンチンについてそれくらいの知識しか持ち合わせていない私や多くの日本人が本作を理解するためには、パンフレットに収められている次の4つのコラムを勉強することが不可欠だ。①アルベルト松本氏（アイデア・ネットワーク代表）の「アルゼンチンの歴史と政治改革が生み出したモンスター家族」、②大場正明氏（映画評論家）の「アルゼンチン社会の隠れた現実を炙り出す異才トラペロ」、③斎藤学氏（精神科医）の「『機械仕掛けの殺し屋』が統率した家族」、④芝山幹郎氏（評論家）の「役者も監督も度胸がよい」。いずれもかなり踏み込んで書かれたコラムだから少し難しいが、こりゃ必読！

＜この主人公の裏には一体何が・・・？＞

本作の主人公となるアルキメデス・ブッチオを演じたギレルモ・フランセーヤは、私が絶賛して星5つをつけた『瞳の奥の秘密』（09年）（『シネマルーム25』69頁参照）で主人公の同僚刑事を演じていた俳優だ。アルキメデスを中心に妻と3人の息子、2人の娘がそろって食卓を囲んでいるシーンを見るといかにも幸せそうな家族だし、会計士でもあったアルキメデスの暮らしはそれなりに裕福そうだが、その裏側には一体どんな事情があり、どんな秘密があったのだろうか？

1982年のフォークランド紛争の敗戦によってアルゼンチンが軍政から民政へと移行する中でアルキメデスは「イサベル・ペロン政権（1973～76年）の側近であったロペスレーガ社会福祉大臣と親しくなり、二十代でありながら公職にも就き、国家情報局や闇の極右組織とも関わるようになった」そうだが、そんな混乱の時代を彼はどのような立場で生き延びようとし、どのような才覚を発揮したのだろうか？

＜家族の絆は？妻の役割は？＞

本作はラストに家族ぐるみで逮捕された後のブッチオ家の人々の刑事処罰の内容が明らかにされるが、それを見るまでもなく、アルキメデスの主犯ぶりに対比して妻と3人の息子2人の娘たちの協力（共犯）の程度・内容はかなり微妙だ。身代金誘拐の被害者はとりあえずブッチオ家の地下にあるいわゆる「ブッチオ刑務所」に収容した上で、被害者の家族と「交渉」し、身代金の額とその授受方法を決め、それが終われば事件は無事解決。それがアルキメデスの基本的なやり口だから、身代金の額はバカでかいものではなく、被害者側が内々に支払える額に設定されていたらしい。誘拐被害者をしばらく地下刑務所に収容している間に被害者の食事を作るのは妻のエピファニ（リリー・ボボヴィッチ）だが、それを運ぶのはアルキメデスだったから、妻をはじめとする家族の関与のレベルはあまり大きくないと言えば、たしかにそのとおりだ。

本作では良くも悪くもアルキメデスが主役だが、当然すべてを知った上で2人の娘にも必要な協力をさせるとともに、アルキメデスの指揮下に見事に組み込まれている妻エピファニの、静かだが大切な補助者としての役割に注目する必要がある。本作ラストでは、アレハンドロ（ピーター・ランサーニ）が突然建物から身を投げた自殺を図るシーンが発生しビックリさせられるが、なぜアレハンドロはそんな行動を？その結果も含めて、本作ラストには家族全員の処罰内容が明らかにされるからそれに注目しつつ、それぞれが現実にブッチオ家の家族の一員としていかなる役割を果たしたのかをしっかりと考えたい。

＜父と長男の絆は？互いの反発は？＞

ビックリするのは、長男のアレハンドロはラグビーチームのトップスターで国民的英雄だったこと。そんな男が裏ではこんな父親の凶悪犯罪の手伝いをしていたわけだ。しかし、長男アレハンドロの共犯の程度は？本作は全編を通してそんな父と長男との絆、そして互いの反発の様子が詳しく描かれているのでそれに注目したい。

本作の展開を観ていると、長男のアレハンドロはあまり身代金誘拐の仕事（？）には向いていなかったようだ。アレハンドロに恋人のモニカ（ステファニア・コエッセル）ができると、父と長男の絆は更に離れていくことになる。他方、長男の反発が顕著になる中で急速浮上するのが、次男マギラ（ガストン・コッチャラーレ）の役割だ。海外生活でかなり太ったというマギラはブエノスアイレスに呼び戻されると、父親が主導する身代金誘拐事件でいかなる役割を？もっとも、本作が描く家族の絆の中核はアルキメデスと長男アレハンドロとの絆と互いの反発だから、そこへの興味と分析をしっかりと！

＜犯行手口は意外に単純かつ幼稚！＞

佐藤浩市の主演で大ヒットした『64ーロクヨンー前編』（16年）（『シネマルーム38』10頁参照）、『64ーロクヨンー後編』（16年）（『シネマルーム38』17頁参照）の冒頭は、複雑で手の込んだ身代金誘拐事件の展開から始まったが、さて本作に見る身代金誘拐事件の手口は？

身代金誘拐は知的レベルの高さを要求される犯罪だという視点で考えれば、本作でアルキメデスが見せる身代金誘拐事件の手口はあまりに単純かつ幼稚だからビックリ！どの地点に車を停車させておくとか、誰がどこでどんな行動を取るとかの手口はあらかじめ計画し、みんながそのとおり行動しているようだが、歩いている人間の口をいきなりふさいで車の中に連れ込もうとする手口はいかがなもの・・・。周りに人がいないことに注意するのは当然だが、もし周りに人がいたらどうするの？その場合は計画の実行を中止するの？

＜犯行がバレたのは電話の声から＞

アルキメデスたちの犯行がバレたのは、ある誘拐事件で被害者側がなかなか金を払うことに同意しないまま、アルキメデスによる電話での「交渉」が長引いたためだ。公衆電話を使っているとはいえ、アルキメデスは電話口に向けて地声で苛立ちながらしゃべっているから、これはあまりに不用心。こんな場合、録音されているのは当然だから、『64ーロクヨンー』で見たように、声の質を変えるよう努力すべきは当然だ。ところが、アルキメデスはそんな初歩的な努力すらしていないからアレ・・・。

逮捕された後、取調官からこの録音テープを聞かされたらアルキメデスは自分の声であることを認めざるをえないから、万事休す。そこで、アルキメデスは仕方なく（？）この声は自分のものだが、これは誰から強制されて話したものだとは弁解したからなるほど、なるほど。いろいろな弁解方法があるものだ。しかも、アルキメデスはその後もずっと犯行を否認し、無罪を主張し続けたというからビックリ！

もっとも、かつて市民の拉致・拘禁あるいは暗殺を業とするアルゼンチンのシークレット・サービス（秘密警察）の一員として市民の中に埋没して暮らしていたアルキメデスにとってはこんなやり方があたり前で、自分たちの天下の時代にはこんな手口でもバレることはなかったという思い上がりがあったのかも・・・。

＜ラストの大捕物と取調べ姿にも注目！＞

「スパイもの」や「潜入捜査もの」では捜査陣が一斉に現場に突入する「大捕物」が見せ場になることが多いが、本作ラストに見るアルゼンチン警察による「ブッチオ家」への突入シーンは現実を踏まえそれを再現したもの（？）だから、とりわけ注目したい。本作のパンフレットには「“ブッチオ家へようこそ”～事件の全貌～」もあるので、それを参照しながらブッチオ家におきた大捕物の全貌を解明したい。

ちなみに、アルキメデスには家の前の歩道を昼夜問わずほうきで毎回30分ぐらい掃くという変わった習慣があったそうだが、それは一体何のため？地下の監禁部屋では扇風機が唯一の換気装置、トイレは厚板の上に置かれた金属製の洗面器で、定期的に掃除されることはなく息ができないほどの悪臭が漂っていたそうだから、ひょっとしてアルキメデスの掃除の習慣はそれとの関連が・・・？